

日本認知心理学会公開シンポジウム

認知心理学のフロンティアVIII

ー感情・感性・コミュニケーションー

10 月 1 日（土）13：00～16：40

工学院大学

ご挨拶

日本認知心理学会理事長
京都女子大学発達教育学部教授 箱田裕司

人間の認知機能の心理学的な解明は、人口の急速な高齢化が進む現代において、そして人間に関わる様々な事故、事件が頻発する今の日本において、喫緊の社会問題への対応が求められる学問領域です。特に昨年、成立した「公認心理師」法案が運用されるようになると、医療、教育、司法の現場と心理学との橋渡し、インターフェースとして認知心理学の重要性はますます増大すると思われま

す。このたび、日本認知心理学会では、文部科学省研究費助成金（研究成果公開促進費）による支援を受け、「認知心理学のフロンティアⅧ～感情・感性・コミュニケーション～」と題して公開シンポジウムを開催することにいたしました。第一部では、公開講演会として、第一線でご活躍の著名な二人の認知心理学者による講演会を企画しました。第二部公開参加型ゼミでは、気鋭の若手研究者に、セッションA「感性と意思決定」と題して「感性と知覚・認知」、「意思決定における熟考と直感」について、セッションB「感情と表情」では、「顔認知と表情認知」「感情とパーソナリティ」について話題提供してもらい、参加者と議論して頂きます。講演を聴き、ゼミに参加いただき、認知心理学の魅力、社会における有用性を感じて頂ければ幸いです。本冊子の最後にアンケート用紙がありますので、どうか御協力ください。

「思いが伝わらない！ — 絵画を通して共感を考える —」

三浦 佳世 九州大学

鑑賞者に表現者の意図が伝わらない、表現者に依頼者の思いが伝わらない、意図とは異なった形で共感（反感）が生まれるなど、感性表現を介した非言語コミュニケーションにおける失敗と成功には、個人の知覚特性から、時代や社会など個人を取り巻く環境まで、多様な要因によって生み出される。ここでは、絵画や写真、パブリックアート（彫刻）やポスターなど、さまざまな時代の多様な芸術表現を例に上げ、依頼者、表現者、鑑賞者間の伝達における意図の「ずれ」について考え、共感（反感）の問題、あるいは、知覚自体の問題について考えてみたい。

1) 依頼者と表現者の意図のずれ：芸術的意図と現実的判断

依頼者から受け取りを拒否された作品がいつの時代にも存在してきた。その理由は登場人物の衣服が気に入らない、寄贈目的が受け入れられない、納期が遅すぎる、スキャンダルになった、宗教的観点から受け入れがたいなど、実にさまざまである。逆に、批判的な表現であるにもかかわらず、快く受容されたケースもある。また、「時代が変わった」ことにより、受け入れ状況が一変した作品も少なくない。芸術家の判断と現実的な事情を通して、認知のずれについて考える。

2) 表現者と鑑賞者の意図のずれ：芸術的意図と社会的認識

個人的な所蔵や美術館での鑑賞と異なり、パブリックアートは公共の場に常設される。このため、鑑賞すべき対象として認知されることは少ないが、繰り返し接触することで、長期的な感性や感情の形成に影響を及ぼすこともある。また、作品の理解が芸術家の意図とずれていて、社会問題に発展する場合もある。芸術に対する社会的認識あるいは社会的判断におけるずれについて考える。

3) 時間軸における評価の偏向：流通量による単純接触効果

接触回数が増えると、評価は高くなることが知られている。また、接触回数が多いと、典型的なものになりやすく、典型的なものは好まれがちである。さらに、接触回数が多く典型的な対象は、処理負荷が低くなり、処理流暢性の観点からも、好ましいと判断されることが増える。実際、印象派芸術における鑑賞者の判断基準を左右する唯一の要因が、流通量あるいは情報への接触量であることを示した研究もある（Cutting, 2003）。このことは、時代が変わると評価が変わる先のケースとも対応する。認知の「ずれ」に関して、時間軸から考えてみる。

4) 表現者の意図が分からない：鑑賞者の知識と理解力の影響

宗教画にせよ、歴史画にせよ、個人の肖像画にせよ、背景情報を持たない場合、作品の「正しい」理解は難しくなる。とはいえ、芸術作品の「正しい」捉え方・感じ方というものがあるのだろうか。

そもそも、芸術に「理解」は必要だろうか。感覚的把握と理解に関し、情報が無いために理解が困難な作品、情報があるのに理解が困難な作品、知識（情報）の有無が理解の差を生む作品（「引用」や「見立て」）、もとより理解を前提としない作品（感じる作品）などを取り上げ、鑑賞者の知識ならびに専門性が表現の認知に及ぼす影響について、眼球運動実験（Miura, T., 2012）や Silvia, P. のアプレイザル理論などを含めて考えてみる。表題の問題もこの要因と関連するだろう。

5) 表現者の意図が分からない：鑑賞者の認知と感情の影響

アンドレ・セラーノの作品 **Piss Christ** は、一部のキリスト教徒においてデモや破壊を生むほど、怒りや反感を買った。一般の人々も作品には戸惑いをもつ。表現の自由あるいは共感の問題は、落書きから猥褻表現まで、芸術領域では常に起こってきたものではある。反感を無理解と捉えるべきだろうか。また、セラーノの一作、美しく思われた作品が、知識を得たとたん評価が一変することは、認知が感情に先立つとする議論と関わってくる。しかし、彼の意図の理解しようとする、むしろ、感情に妨げられる。共感はいつ、どの過程で、どのように形成されるのだろうか。理解と共感の関係について考える。

6) 表現者の意図が分からない：表現者の知識の影響

陰影に基づく凹凸知覚（**Shape from shading**）は無意識的推論のひとつで、上部が明るく下部が暗い物体を凸、その逆の物体を凹として判断する現象である。特に左上からの光線に対して、この判断は瞬時に行われる。知覚的制約に違反する表現は、見る者に混乱を与え、理解を妨げる。表現者の知識不足が不適切な表現をもたらす例は、構図や色彩の選択にも見ることができる。

7) 表現者と鑑賞者の知覚のずれ：共感の基盤は安定しているのか？

“**The dress**”（2015）は、知覚の恒常性に関わると考えられる現象で、自分の見ている色が他者の見ている色と異なっていることを示すものである。しかし、そうだと分かっても、見え方を変えることは難しい。「果たして、他者の見ているもの、感じているものは理解できるか」という自我問題を突きつけられる事例と言える。見方が異なる場合に表現の意図は伝わるのか、共感はあり得るのか。この点に関し、さらに、体制化に焦点を当てた研究、すなわち「ジェームズの犬」およびランダムドットのよき評価実験を通して、初期的段階での知覚と評価の「ずれ」について考える。

「表現者の意図と認知されることのずれ」は、知覚から評価で、感情から理解まで、あるいは、個人から社会まで、多様な視点から接近できる幅広い問題である。芸術においては、ある種の「ずれ」がより作品を魅力的にし、存在意義をもたせる場合もあるだろう。芸術作品における共感あるいは反感は認知のずれ、つまりは誤解も含めた中で考えていくべき問題なのだろう。

文献：

三浦佳世（2007）知覚と感性の心理学. 岩波書店.

「表情による感情表出とその理解」

吉川左紀子 京都大学こころの未来研究センター

初めて訪れた町で人に道を聞く、という状況を想像してみよう。私たちは、不機嫌そうな人よりも穏やかな表情の人に、いらいらしたり大声で笑っている人よりも落ち着いた表情の人に声をかけようとするだろう。顔の表情は、人が人に出会い、コミュニケーションを始めるとき、最初にその人の情報を得るために不可欠な「視覚情報」である。21世紀を生きる私たちのコミュニケーション手段は、情報機器の発達によって大きく変化してきた。人の顔を見るよりもスマホの画面を見る時間が長くなり、時々の相手の表情の変化を見ながらやりとりする対面コミュニケーションの機会は、IT機器が普及する以前に比べると格段に少なくなっている。そうした変化とともに、相手の表情の意味を的確に読み取ることを苦手とする人や、表情に対して注意を払わない人も増えていると思われる。表情認識だけでなく、表情の表出も同様で、対面コミュニケーションの機会が減ると、表情の変化を生み出す表情筋を動かすことも少なくなり、結果として「生き生きと変化する豊かな表情」が育まれる機会も少なくなっていく。私たちは、意図せずして「表情が見えないコミュニケーション」「無表情な対面コミュニケーション」の時代に向かっているのかもしれない。

しかしこのような時代の中にあっても、表情を通じた心の理解、感情の理解が、生物としての人間が本来もつコミュニケーションの原型であることには変わりがない。「だいじょうぶです」や「ありがとう」の言葉で伝えられる相手の気持ちは、言語理解だけでは十分ではなく、困ったような笑顔や不機嫌な表情といった、言葉とともに表出される顔の表情からその真意が伝わる。対面コミュニケーションでは、言葉と表情を組み合わせた「他者の心の状態」についての瞬時の推論が必要なのである。

表情など非言語情報による感情の表出や、表情による感情の認識は、認知機能が衰えた高齢者とのコミュニケーションではとくに重要であり、認知症高齢者のケアとして最近注目されている「ユマニチュード」のような手法では、ケアする人がケアされる人と出会う場面での表情や視線の使い方に関して、数多くの具体的な「スキル」が提案されている。

本講演では、「表情による感情表出とその理解」について、最近の脳科学や行動科学の研究成果を取り上げながら、対面コミュニケーションにおける、表情による感情表出やその認識の特性についてお話したい。

文献

吉川左紀子 感情心理学：人と人が出会うとき．内田伸子・板倉昭二（編）2015 高校生のための心理学講座：こころの不思議を解き明かそう 誠信書房

イヴ・ジネスト、ロゼット・マレスコッティ著（日本語監修）本田美和子 2016 ユマニチュードという革命：なぜ、このケアで認知症高齢者と心が通うのか 誠文堂新光社

「感性と知覚・認知」

作田 由衣子 実践女子大学生生活科学部生活文化学科

作田は、これまで人の持つ感性の働きに着目し、感性が認知や記憶に及ぼす影響について明らかにしてきた（作田・行場、2003；Sakuta & Gyoba, 2005; Sakuta et al., 2015 他）。本講演では感性を通して感受される「印象」に着目し、主に感性の関わる知覚・認知について概説する。

1) 感性とは？

感性は、心理学だけでなく工学や言語学、脳科学など幅広い分野で関心を集めている。感性と対になる言葉として「知性」という言葉がある。知的処理は論理性・客観性を重視するのに対して感性処理は快・不快や主観性を重視するなど、様々な点で相補的な性質を持つ。たとえば人の顔を見るときにも、大体の年齢や性別など客観的情報の処理だけでなく、その人が魅力的かどうかなど、より複雑で主観的な処理も同時に行われる。

人は顔、色、音楽、香りなど、様々な対象について、「美しい-醜い」「快-不快」「明るい-暗い」「強い-弱い」など、共通の言葉で評価することができる。顔や色は視覚情報、音楽は聴覚情報であるが、このように異なる感覚モダリティの情報に対して同じような言葉で評価することができるのは、考えてみると不思議なことである。しかも、本来、該当する感覚モダリティ以外のモダリティを表現するはずの言葉が、比喩表現に用いられることさえある（共感覚的比喩）。たとえば「甘い声」という表現があるが、甘いは味覚を表す形容詞であるにもかかわらず、ここでは声という聴覚的な名詞を修飾している。どうしてこのようなことが可能なのだろうか。

感覚・知覚という側面から考えると、視覚と聴覚など複数の感覚同士が相互に影響しあうという感覚間相互作用は数多くの研究で確認されている。また、複数の感覚間で共通の尺度で感覚の強度などを測定すること（クロスモダリティ・マッチング）や、快-不快という軸において複数の刺激（匂いと表情など）を対応させること（アフェクティブ・マッチング）も可能である。さらに、丸みを帯びた形には「マルマ」のようなマ行の柔らかい音がマッチするというように、無意味図形や無意味語に対して、共通する象徴性を感じ取ることがある（音象徴）。このような知覚的・認知的特性がモダリティ間や異なる刺激間で共通した共感覚的な評価システムを形成すると考えられる。そうした評価システムは「明るい-暗い」「強い-弱い」など多様な形容詞対を用いるセマンティック・ディファレンシャル法（Osgood et al., 1957）という印象評価手法の土台となっている。

2) 色と形の感知情報処理～象徴性と印象

本来無意味であるはずの単純な形にも、人は様々な象徴性を見出してしまふ。大山らは形の持つ象徴性について、大規模な国際比較調査を行った（Oyama et al., 2008）。その結果、「幸福」を表す形や、「永遠」を表す形など、文化や言語を超え、概念と形の対応関係に共通性が見られた。さらに大山らは、そうした無意味図形の持つ印象と、色の持つ印象をそれぞれ測定し、図形と色を組み合わせ

せた場合の全体の印象についても検討した (Oyama et al., 1998)。その結果、印象の種類によって異なる相互作用が生じることが示唆された。

作田らは、形と色のペアに対する記憶について検討した (Sakuta & Gyoba, 2006)。その結果、活動性 (明るい - 暗いなど)・力量性 (強い - 弱いなど) では印象が一致したペアが、評価性 (好き - 嫌いなど) では印象が不一致のペアが再認されやすいことが示された。さらにこの傾向は色と形だけでなく、顔と名刺というより複雑な刺激のペアについても見られるものであった (作田・行場, 2003)。「印象」は主観的であいまいなものと思われがちであるが、その性質を理解することで、記憶に残りやすいデザインの提案など様々なところで応用が可能であろう。

3) 顔の感性情報処理～感性印象と特性推論～

近年、顔の持つ印象が意外な影響力を持っていることが分かってきている。たとえば、選挙の投票場面において、立候補者の顔の印象が投票行動に影響していることを示した研究もある (Todorov et al., 2005)。社会的な場面において、相手が自分にとって敵か味方かを素早く判断するために、顔の見た目のみを手掛かりとした特性推論ができれば適応的であると考えられる。そうした顔に基づく特性推論が乳児でも可能であるかを選好注視法により検討した (Sakuta et al., 2015)。その結果、6～8か月の乳児でも、「信頼感が高い」と判断された顔をよく注視することが明らかになった。

顔は色や形などとは異なり社会的意味を持つ刺激であるため、顔の印象については社会心理学の領域において「特性推論」という文脈で研究されることが多い。しかし、顔も内面的特性だけでなく、他の刺激と同様に知覚情報に基づく感性評価がなされていることは否定できない。作田らの研究において、乳児でも信頼感印象に対する感受性がみられたが、人物の内面的特性としての信頼感というよりも、知覚情報から直接感受される感性印象としての信頼感に対する反応である可能性も考えられる。この考え方は、質感など高次の知覚が、より単純な画像特徴によりもたらされる (本吉, 2014) との指摘とも整合する。

今後、乳幼児を対象とした研究を重ねることで、特性推論における感性の役割を明らかにするとともに、感性そのものに対する理解を深めることが期待される。

文献

- 作田由衣子・行場次朗 (2003) 顔と名刺の印象とそれらの記憶容易性. *イメージ心理学研究*, 1, 73-80.
- Sakuta, Y. & Gyoba, J. (2006) Affective impressions and memorability of color-form combinations. *The Journal of General Psychology*, 133, 191-207.
- Sakuta, Y., et al. (2015) Infants prefer a trustworthy person: An early sign of social cognition in infants. *Association for Psychological Science 27th Annual Convention*, May 2015, NY.
- Todorov, A. et al. (2005) Inferences of competence from faces predict election outcomes. *Science*, 308, 1623-1626.
- 本吉 勇 (2014) 視覚認知と画像統計量. *Cognitive Studies*, 21, 304-313.
- Osgood et al. (1957) *The measurement of meaning*. Urbana, IL: University of Illinois Press.
- Oyama et al. (1998) Synesthetic tendencies as the basis of sensory symbolism: A review of a series of experiments by means of semantic differential. *Psychologia*, 41, 203-215.
- Oyama et al. (2008) Similarities of form symbolism among various languages and geographical regions. *Psychologia*, 51, 170-184.

「意思決定における熟考と直感」

朝倉暢彦 追手門学院大学心理学部

意思決定とは、決定者に対して様々な有用性をもつ選択肢の中から、状況に応じて適切な選択肢を選ぶ行動プロセスである。この選択肢の有用性が確定的なものであれば、熟考による合理的判断によって適切な意思決定が行える。しかし、選択肢の有用性は、我々が生活していく中で常に確定したものと与えられるわけではない。例えば、ある種のギャンブルのように、特定の選択肢を選択したことによる報酬（あるいは損失）額、さらにはその報酬（損失）が得られるかどうかの確率すらも不確定な状況も存在する。このような曖昧性のもとでの意思決定では、決定理由を言葉で説明できないような直感的判断に頼らざるを得ない。近年、このような直感的な意思決定において、決定者の情動状態が選択肢の評価や選択行動に強く影響していることが指摘されており、情動的意決定（emotional decision making）という枠組みで研究が進められている。本講演では、意思決定において「熟考」と「直感」という2つのプロセスがどのように機能しているかについての認知心理学的知見を概説し、特に直感の機能について、意思決定者の感情や身体・生理的反応との関わりの面から考察する。

1) 意思決定における二重過程理論

意思決定においては、高速で連想的そして無意識的な直感のプロセス、および低速で論理的そして意識的な熟考のプロセスが機能しているとされ、これを二重過程理論（dual process theory）と呼ぶ。行動経済学におけるプロスペクト理論を提唱したダニエル・カーネマンによれば、直感的意決定ではその迅速な判断のため、ときには非合理的な経験則であるヒューリスティックを採用するのに対し、熟考による意決定では時間をかけて合理的判断を行うとされている。

2) 認知心理学における「直感」

直感を実験心理学的に検討するパラダイムとして、意味結束性課題（semantic coherence task）がよく用いられる。具体的には、3つの単語（例：塩・深い・泡や夢・球・本など）を呈示し、それぞれの3つの単語の組に共通の意味的つながりがある別の単語が存在するかどうかを判断する課題である（例において、前者には「海」という答えがあるが、後者にはない）。実験のポイントは、答えとなる単語を明示的に思いつき意識する前に判断を行わせることであり、このような状況においても健常な実験参加者ではチャンスレベル以上の正答率で判断を下すことができる。一方、この課題に対して、単語間の意味結束性を熟考させると、却ってその判断成績が低下することが知られている。

3) 感情と意思決定

直感に必要な連想的で柔軟な処理プロセスは、ポジティブな気分の際に働きやすい。実際、意味

結束性課題の成績もポジティブな気分で向上することが示されている。一方、ネガティブな気分は、思考と行動のパターンの選択肢を狭めるように働く。したがって、分析的で系統的な熟考による意思決定が要求される場面では、ネガティブな気分の方が適していると考えられる。以上の気分による意思決定方略の違いは、ポジティブ感情が注意を広め大域的な認知処理を促進し、ネガティブ感情が注意を狭め局所的な認知処理を促進するとして従来の主張と符合する。

4) ソマティック・マーカー仮説

情動がどのようにして生じるかに関して、その起源を脳中枢の活動そのものに認めるキャノン・バード説と、身体的反応および関連する生理的变化が情動体験に先駆けて生じるとするジェームズ・ランゲ説が提唱されている。神経心理学者のダマシオはジェームズ・ランゲ説の立場から、脳内の腹内側前頭前野 (vmPFC) を中心とした情動ネットワークにおいて情動的な身体的反応が表現および処理され、直感的な意思決定に影響を与えるとするソマティック・マーカー仮説を提案した。ここでソマティック・マーカーとは意思決定に影響する身体からの信号のことである。この仮説によれば、過去に経験した選択行動に対して、その情動的意味付けと付随する身体的反応の連合が脳内で形成されており、意思決定課題に際しては、この情動的な身体反応が熟考による合理的判断に先立って生じることで適切な意思決定を誘導する。実際、vmPFC 損傷患者は認知・運動機能に異常はないものの、社会的場面における行動や意思決定に障害があり、加えて感情表現や感情的な判断にも問題があることが明らかにされている。この知見をソマティック・マーカー仮説から解釈すれば、vmPFC の損傷により情動処理の不調がもたらされるのに加えてソマティック・マーカーが機能不全となり、意思決定に障害が生じたということになる。

参考文献

- アントニオ・R・ダマシオ (2005) 感じる脳：情動と感情の脳科学 よみがえるスピノザ. 田中三彦 (訳) ダイヤモンド社.
- ダニエル・カーネマン (2012) ファスト&スロー (上・下). 村井章子 (訳) 早川書房.

「顔認知と表情認知」

小松 佐穂子 徳山大学福祉情報学部

人は、顔からさまざまな情報を読み取る。相手は誰なのか（人物情報）、どのような感情状態か（表情情報）、男性か女性か（性別）、何歳か（年齢）…。これらの情報を読み取り相手を認知することは、対人コミュニケーションでは非常に重要である。さらに我々は、これらの複数の情報を合わせて、対人認知を行う。今回は、人物と表情をとりあげ、両認知過程の相互関係についてお話を。

1) 顔認知（人物認知）と表情認知の関係

長い間、人物認知と表情認知は、完全に独立した関係であると考えられてきた。それを表した最も有名なモデルが、Bruce & Young (1986)の顔認識モデル（図1）である。これによると、顔は最初の符号化段階で、表情とは独立した記述がされ（図1の expression-independent descriptions）、顔認識ユニット（face recognition units）に送られて、人物認知が行われる。一方の表情認知は、図の左上に“expression analysis”とされているように、完全に人物認知とは独立した過程として表現されている。

このモデルが確立された背景には、実験心理学はもちろんのこと、脳損傷患者の症例、神経生理学など、さまざまな分野から両過程の独立を示す結果が報告されたことがある。例えば相貌失認患者の中に、人物認知はできないが表情認知は可能であるという症例、逆に表情認知はできないが人物認知は可能であるという症例が存在した。これはいわゆる二重解離の状態であり、両過程が独立していることを示唆する。

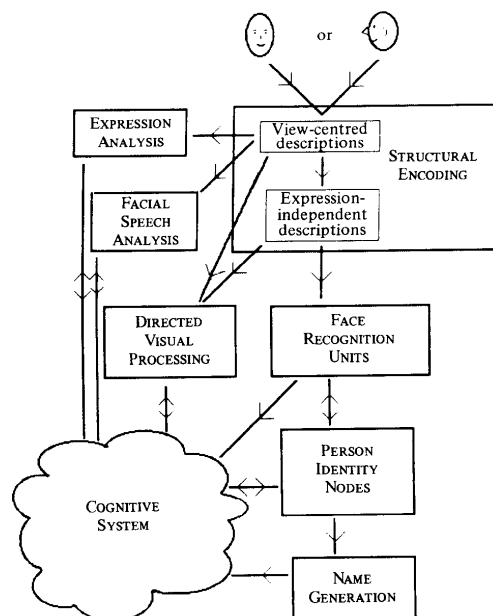


図1. Bruce & Young (1986)の顔認識モデル。

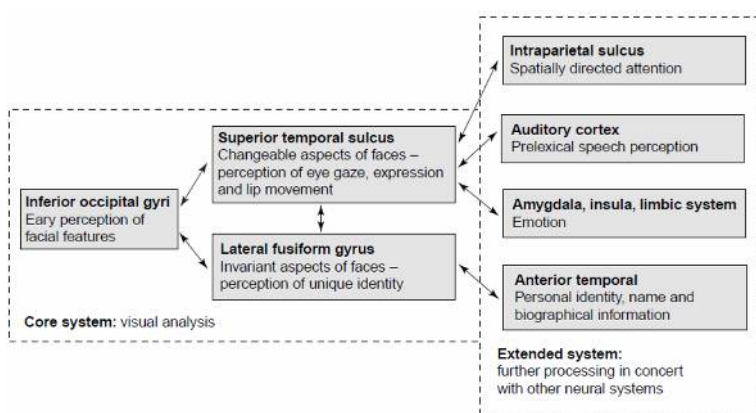


図2. Haxby et al. (2000)のモデル。

Bruce & Young (1986)のモデル以外にも、脳のイメージング研究や誘発電位研究の知見から、Haxby et al. (2000)が、顔認知の脳神経系モデルを提案している（図2）。このモデルでも、表情認知と人物認知はそれぞれの責任部位が異なることが示されており、表情認知は上側頭溝（図2の superior temporal sulcus: STS）、人物認知は紡錘状回（lateral fusiform gyrus）とされている。

2) 人物情報は表情認知に影響する：非対称的關係

しかし選択的注意課題を用いた心理学研究から、表情は人物認知に影響しないが、人物は表情認知に干渉するという非対称的關係が明らかにされた。Schweinberger & Soukup (1998)は、Garner 課題を用いてこの点を検討した(図 3)。Garner 課題とは、一方の情報を統制した状態で判断する統制条件と変化した状態で判断する変

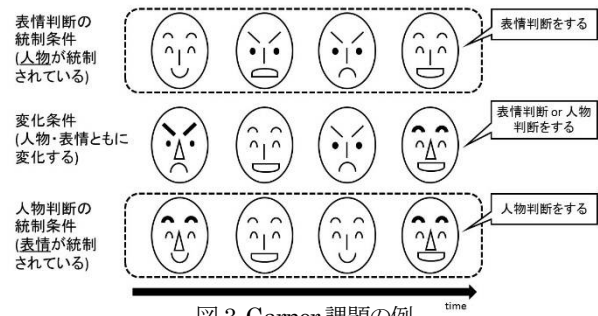


図 3. Garner 課題の例

化条件の 2 条件間で反応時間を検討し、統制条件より変化条件の方が反応時間が長ければ、干渉したことを示す課題である。この課題を用いた結果、人物判断では表情の統制・変化条件間に反応時間の有意差はなかったが、表情判断では人物を変化させると有意に長くなることが明らかになり、人物情報のみ表情認知に干渉するという、非対称的關係を明らかにした。

3) 人物情報のどの側面が影響しているのか、どの段階で影響しているのか

小松・箱田 (2011)は、人物情報の何が表情認知に影響しているかを検討するために、顔画像を倒立呈示およびネガ呈示 (白黒を反転させる)し Garner 課題を実施した。倒立呈示では顔の全体情報 (目、鼻、口などの配置情報、部分には還元できない情報) が阻害され、ネガ呈示では顔の表面情報 (陰影、色、肌のきめなど)が阻害される。いずれも顔認知において重要な情報である。実験の結果、ともに表情認知への人物情報の干渉が消失した。したがって表情認知に、顔の全体情報、表面情報が影響していることが明らかになった。

Komatsu et al. (2010)は、人物情報がどの段階で表情認知に影響しているのかを検討するために、Garner 課題遂行時の誘発脳波を計測した。その結果、顔の構造的符号化に関与している N170 成分の潜時において、表情判断の統制条件と変化条件に有意差が明らかになった。この結果は、人物情報の影響は、顔の構造の符号化が行われている段階で生じていることを示すものである。

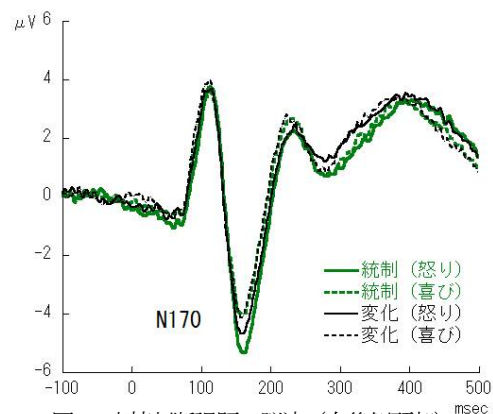


図 4. 表情判断課題の脳波 (右後側頭部)

Bruce, V. & Young, A. (1986). Understanding face recognition. *British Journal of Psychology*, 77, 305–327.

Haxby, J. V. et al. (2000). The distributed human neural system for face perception. *Trends in Cognitive Sciences*, 4, 223–233.

小松佐穂子・箱田裕司 (2011). 表情認知と人物認知の非対称的關係に与える倒立効果およびネガ効果. *認知心理学研究*, 9, 37–44.

Komatsu, S. et al. (2010). Facial identity facilitates facial expression recognition: A high-density ERP study. *The 29th International Congress of Clinical Neurophysiology*.

Schweinberger, S. R., & Soukup, G. R. (1998). Asymmetric relationships among perceptions of facial identity, emotion, and facial speech. *Journal of Experimental Psychology: Human Perception and Performance*, 24, 1748–1765.

「感情とパーソナリティ」

寺崎 正治 川崎医療福祉大学医療福祉学部

不安や喜びなど、感情は時々に変化する状態として一般には理解されている。その一方で心配性や陽気な人と言った具合に、個人に特有な性質として理解されることもある。感情を一過的に変化する状態とある程度の永続性を有する特性の2側面からとらえることが可能であり、特に感情を特性として考えたとき、それはパーソナリティの中核をなす性質であると考えることができる。本講演では感情における特性とパーソナリティの間には密接な関係があること、さらにはこのようなパーソナリティの個人差から人の適応方略の違いを理解することができることについて話したい。

1) 感情の状態と特性

感情における状態と特性を区別すべきことを最初に主張したのは **Spielberger(1966)**である。状態不安と特性不安を概念的に区別し、さらに両者を状態・特性不安尺度を用いて測定することにより、その後の不安研究は目覚ましく進展した。

2) 感情の基本次元

感情は不安ばかりではない。その他の感情についても状態と特性を区別することは重要である。状態としての感情はさまざまな感情状態尺度によって測定されるようになった。当初これらの尺度は薬物の効果測定など、応用研究の道具として用いられたが、後には感情の構造を探求する基礎的研究の道具としても使われた。**Watson & Tellegen(1985)**は過去に感情因子を同定するために行われた9つの研究のデータを再分析し、いずれのデータからも同様の優勢な2因子が抽出された。これらは肯定的感情と否定的感情の因子であるとし、感情の2次元モデルが提唱された。

3) 感情の基本次元とパーソナリティの基本次元は一致する

一方、パーソナリティの基本次元として古くから知られているものの1つが **Eysenck(1967)**の外向性、神経症的傾向の2次元モデルである。そして、外向性と肯定的感情、神経症的傾向と否定的感情との間にはかなり堅固な関連があることが報告されるようになった。すなわち、人は外向的であるほど肯定的感情を経験することが多く、また、神経症的傾向が高い人ほど、否定的感情を経験することが多いという経験的事実がある。

4) パーソナリティ理論からの説明

次に問題になるのは、このような関連をどのように説明するかである。この点に関しては諸説がある。もともと **Eysenck** のパーソナリティ理論は生物理論であり、外向性と神経症的傾向はその根幹は遺伝的に決定されると考えた。**Eysenck** の理論の後継になるのが、**Gray(1987)**の理論である。**Gray** は **Eysenck** 同様、パーソナリティは生物学的基礎をもつと考える立場である。**Gray** は脳内に

における2つの独立した系として報酬系と罰系を仮定した。報酬系は生体にとって報酬となるような刺激（快をもたらすような刺激）に対する感受性を支配し、一方、罰系は罰刺激（不快をもたらすような刺激）に対する感受性を支配していると考えた。報酬系に対応するパーソナリティ次元を衝動性、罰系に対応する次元を不安と名付けたが、これを Eysenck の2次元である外向性と神経症的傾向に置き換えてもよいのではないかと個人的には思っている。報酬に対する感受性が高い個人（外向的な人）はそのような刺激に対する閾値が低く、このため、このような刺激に対して喚起される肯定的感情の経験頻度や強度が感受性が低い個人（内向的な人）に比べ多くあるいは強くなると予測される。一方、罰に対する感受性が高い個人（神経症的傾向が高い人）は感受性が低い個人（神経症的傾向が低い人）に比べ、罰刺激に対する感受性が高いが故に否定的感情を経験する頻度が高かったり強度が強くなるのではないかと予測される。このような生物理論に対して、パーソナリティが果たす道具的機能から説明しようとする研究者もいる。すなわち、ある特定のパーソナリティはその行動傾向から特定の生活環境の生成を促進し、このようにして作られた生活スタイルが感情における永続性を持った個人差を生み出すと考えた。たとえば、社交的な行動傾向をもつ外向的な人は内向的な人に比べ、対人相互作用によってもたらされる肯定的な感情が喚起されるという恩恵をより多く経験することになるのではないかと考えるのである。しかし、この立場を支持する証拠は錯綜しており、しかも弱いように思われる。個人的には生物理論の方に分があるように思う。ただし、両者の説明は排他的なものではない。

5) パーソナリティの認知 – 適応モデル

パーソナリティが適応行動にどのように関連するかを説明するための包括的な枠組みを提供する理論の一つに、認知-適応理論がある(Mathews, Deary, & Whiteman, 2003)。パーソナリティの原因因子は遺伝的なものであったり、発達初期における学習の結果であったりするが、これらはパーソナリティの基本要素（神経過程、情報処理過程）の特質を形成する。その結果、人と環境との間の相互作用のあり方に個人差が生まれると考える。

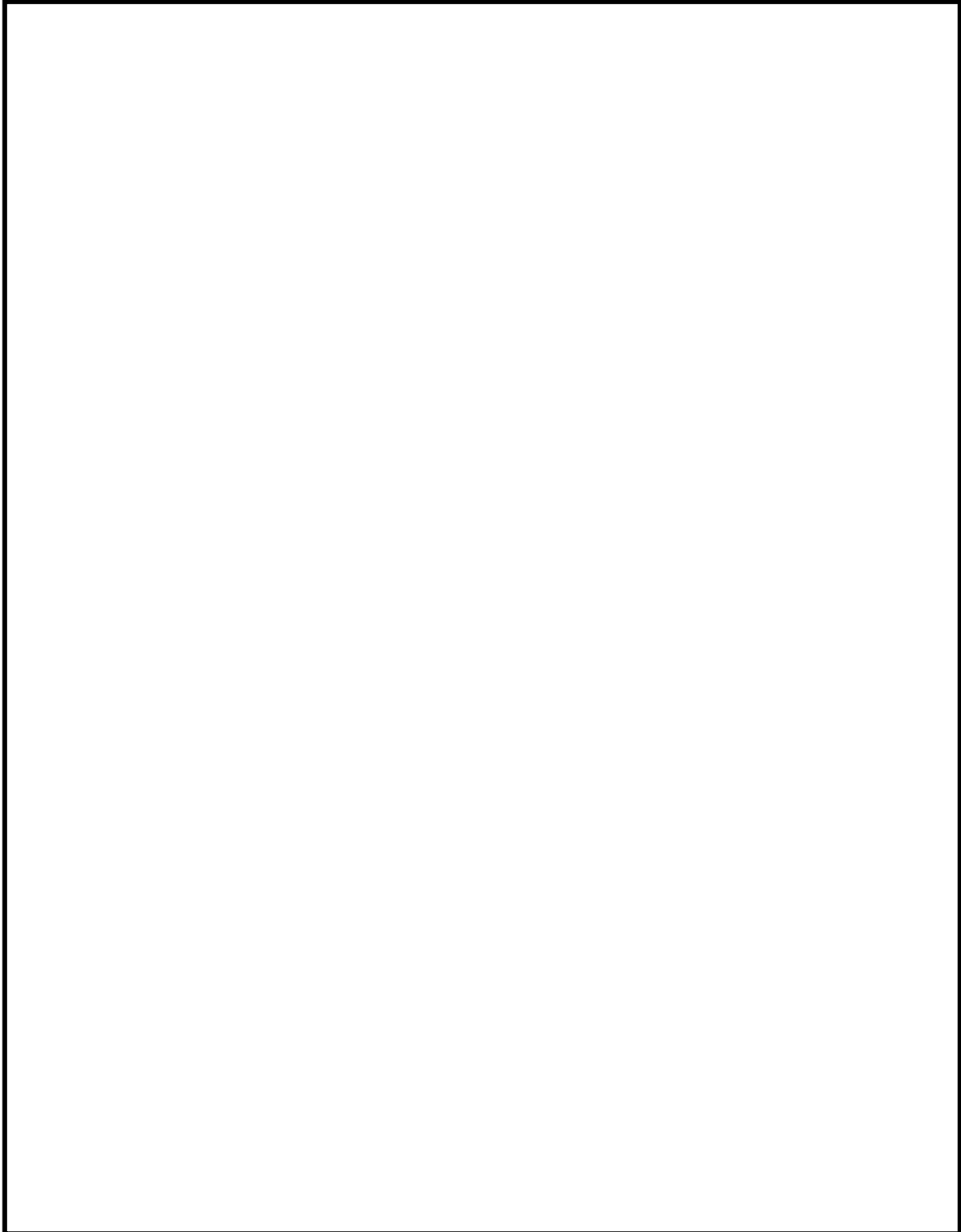
引用文献

- Eysenck, H. J. (1967) *The biological basis of personality*. Springfield : Thomas.
- Gray, J. A. (1987) Perspectives on anxiety and impulsivity : A commentary. *Journal of Research in Personality*, 21, 493 – 509.
- Mathews, G., Deary, I., & Whiteman, M. (2003) *Personality traits*. 2nd ed. Cambridge : Cambridge University Press.
- Spielberger, C. D. (1966) *Anxiety and behavior*. London : Academic Press.
- Watson, D. & Tellegen, A. (1985) Towards a consensual structure of mood. *Psychological Bulletin*, 98, 219 - 235.

ご感想をお寄せください

本日のシンポジウムの感想等を下の枠内に自由に記入していただき、このページを外して、受付もしくは会場スタッフにお渡してください。

本日はお疲れさまでした。ご参加ありがとうございました。

A large, empty rectangular box with a black border, intended for participants to write their feedback or impressions from the symposium. The box is currently blank.